魔法使いと風精霊

田中２３号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法使いと風精霊

【Ｎコード】
Ｎ５８８４Ｚ

【作者名】
田中２３号

【あらすじ】
趣味は剣と弓と錬金、特技は魔力節約、最終学歴は王都魔道学院卒業。そんな魔法使いと、インチキ魔法で契約した高位精霊の物語。
魔法使いと精霊がイチャイチャしたりしなかったりします。

プロローグ

木々に囲まれた街道を行く男が一人、のんびりと歩いている。

その静寂を破る言葉が響く。

「おい、お前！荷物と腰の剣をおいていきな！」

賊が3人道を塞ぐ。

しかし、道を行く男は止まらず進む。

「と、止まらないと切るぞ！」

賊は動揺しつつも男を威嚇する。

しかし男は止まらない。

「「「うおおお！」」」

そして、とうとう賊は一斉に男に襲い掛かる。

それに対して男は腰の剣を抜かずに、手を賊に突き出して短く言葉をつむぐ。

「風よ、突き進め」

瞬間突風が吹き荒れ、賊はまとめて吹き飛ばされ、木々に打ちつけられ、昏倒する。

そして男は、何事も無かったかかのように、また歩き出した。

「俺、かっこよくね？」

第一話「魔法使いと精霊の関係」

先ほど、賊を倒した男、名をクリスと言う。

今クリスは、生まれ故郷へ続く道を歩いてる。

「かっこよさで言えば、２９点ですね。ぎりぎり赤点。主の学院でのテストの平均点よりはましですね」

「な、なんだと・・・。俺のかっこよさも精霊にはつたわらんか・・・、嘆かわしいなぁ。あとテストの点は言わないで・・・」

「精霊に伝わらないというか、人間にも伝わってなかったじゃないですか、可哀想な主、学院の創立記念パーティーも一人で・・・。あとテストが近づくと意味もなく掃除しだしたり、趣味の錬金したりしてるから赤点なんですよ」

「あああああ！やめて、僕の心の柔らかいところを言葉のナイフで抉らないで！！あとテスト前にいつも二番目の趣味に走ってしまうのは病気なんだよ！なぜか一番目は気が引けてやれないんだ」

「まったく。そもそも主は格好つけずに、口を閉じていれば外見も悪くないのに。勉強もやればできるんですから。まぁ、卒業できたのでよしとしましょう」

「フウリは俺の母親か！」

クリスと話しているのは、彼と契約した風の精霊、フウリだ。

「ほぼ無償で面倒を見ているという点では、母親と言ってもいいかもしれませんね」

「あはい。本当にすみません。未熟者で。けど、普通フウリ級の精霊と直で契約結ぶのは人間的にきついんですよねー」

「クリスは、魔力節約の鬼ですが、魔力自体は一般人に毛が生えたくらいですからね。まぁ、あなたの魔法は面白いので、契約に不満はありませんがね。本当に良く考え付きましたね、契約に節約魔法を組み込んで、精霊の魔力消費を抑えるなんて」

普通、精霊は魔力のある所にいて、上位の精霊ほど魔力の多い所にいる。

契約するためには、場所から精霊が受けている魔力以上の魔力を契約者が提供しないといけない。

精霊が合意すれば、魔力が少なくても契約できるが、その分精霊の格はおちる。

しかし、クリスは得意の節約魔法を契約魔法に組み込んでフウリに使い、提供する魔力は少ないのにフウリの格を落とさないという、半ば詐欺のような方法でフウリと契約している。

「いや、本当にできると思わなかった。内容を理解して契約してくれる精霊となると高位精霊だからな、下手したら不興かって死んでたな！」

「私は大らかな精霊ですからね。有難く思ってくれていいですよ。そして余剰魔力を私に渡していいですよ？」

「ば、馬鹿言うな。余剰なんてあるわけないだろおおお！いくら節約してるからって、あんた自分の格を考えろよ！！ほとんど限界値の魔力を提供してるんですだよ！？俺に干乾びろって言うのか！」

「うふふ、そんなこと言って。私知ってるんですよ」

「何をしってるんだ、性悪精霊！」

「まぁ、性悪だなんて。ただ、前に拾った魔力を吸い取る指輪に、卒業試験前に錬金を繰り返して、吸った魔力を蓄積できるようにしたでしょう？今主がつけてる指輪、おいしそうですね？」

精霊が人間と契約するメリットとして、人間の魔力は世界に漂っている魔力より、人間の感覚で言えば、美味しいのである。

「勘弁してください。ほんと。自分の使える魔力ほとんどないんです。塵もかき集めないと、錬金も満足にできない可哀想な魔法使いになってしまいます。どうかこの指輪だけは・・・！」

「あらあら、仕方ない主ですねー」

「ありがとうございやす、ありがとうございやす！この恩は魔力量向上魔法ができたらお返しいたしますので」

「そもそもこの面白い契約は、その魔法を完成させるために精霊の魔力取り込みの仕組みを研究するためでしたね」

精霊は無意識に世界から魔力を吸収して段々と格を上げ、取り込める魔力も増えていく。

人間は魔力を少しずつ取り込み、上限まで溜め込んだら、なんらかの形で放出するまでは魔力を取り込まない。

、

クリスは、体に取り込む上限を精霊のように増やしていけないかと思ったのである。

「けど、なかなか研究も進まないまま卒業しちゃったからなぁ」

「向こうでは、引く手数多でしたし、宮廷魔法院にも内々に推薦をもらっていましたのにね」

「勘弁してくれ。あんなギスギスした職場。推薦貰った日にそれまで話したことない貴族がどの派閥に入れとか、半ば脅し気味に言ってくるんだぜ。ハニートラップまであるし、女性不信ですよ俺は」

「なら、あのままギルドで遺跡に潜っててもよかったじゃないですか。あと主は女性不信になっても意味がないでしょう、周りに元々いないんですから」

「あれはあくまでお小遣い稼ぎなの、なんでもかんでも師匠に面倒みてもらうわけにもいかないでしょ。あと推薦蹴ったら、女性どころか野郎もいなくなりました」

「一生の仕事にするには、リスキーですからね、あの仕事も。まぁ、他にもいろいろあったと思いますが、推薦蹴ったらそっちもなくなりましたよね」

「上に睨まれるとやばいってのは知ってたつもりだけど、平民にできる想像のさらに上のやばさだったんだよ！」

国の魔法関係の最高権力は、もちろん宮廷魔法院である。

「お陰で魔法学院卒業で無職ですからね、主。」

「先生たちの哀れみの目線が今でもトラウマです」

「私もひそかに哀れんでました」

「泣くぞ！！」

「はいはい、落ち着いてください、主。お師匠さまのところのは何で蹴ったんですか。いいと思うんですけどね、学院教師も」

「それこそ、師匠に迷惑かかるっしょ。宮廷魔法院に睨まれてる小僧なんぞが入ったら」

「迷惑かけるのはいまさらじゃないですかー。気に入らない貴族のお坊ちゃんをハメたときも、お小遣い稼ぎがばれたときも、お城に忍び込んだときも、推薦蹴ったときも、他にもいろいろ全部、後始末してくれたのはお師匠さまじゃないですか」

クリスの師匠は、魔法の名門貴族の家柄なのでいろいろなところに顔が利く。

「今思うと、学院で無茶苦茶してたから、学院でほとんど人がよってこなかったんじゃ」

「それはそうでしょう。挙句に私のような高位精霊連れてますからね、怖がられますよ。テストの点があれでも」

「お、俺の青春が・・・。もう少しおとなしくしていればよかったのかぁぁぁ！！」

「主がおとなしくとか、無理がありますよ。まぁ、けど、男友達なら結構いたじゃないですか」

「あいつらほとんど彼女やら許婚やらいたからなぁ。友情より女を選びやがって・・・」

「それでパーティーではほとんど一人ぼっちでしたよね。だからってパーティー会場を事前に爆破しようとするのはどうかと思いますけど」

爆破は、土壇場で裏切り者が出て、未遂に終わった。

しかし、この計画への男性参加者が多く、学院ではそういった生徒への配慮も考えるようになったとか。

「嫉妬の炎が俺を狂わせるんだ・・・。あれは予想以上に人も集まって引けなくなったのもあるけどな」

「嫉妬するくらいなら、彼女を作ればよかったじゃないですか」

「簡単に作れるならそうしてるよ！！」

「主に気のある人もいたじゃないですか、あのショートヘアの金髪碧眼で、炎魔法が得意で、精霊とも契約してた・・・ような？」

「あいつの精霊はお前に怯えて、俺の前じゃほとんど出てこなかっ

たからな」

フウリは上位精霊の中でも最上位に位置されるほど高位な風精霊のため、中位、下位精霊は一緒の空間にいるだけでもその影響をもろに受け、風と相反する土属性の精霊は消してしまうこともある。

「あと、あいつは男だ！！」

「え？」

「え？」

「まぁ、主がそう言うならいいです」

「なんだその引っかかるいい方！」

「気にしないで下さい、ところで主の生まれ故郷はまだですか？」

「なんと強引な話題変換。あと少し、この森越えればすぐ着くからおとなしくしてるんだぞ」

「なら飛んで行きましょうよ、主！」

「うーん、そうするか。そんな距離ないしな、森を突っ切ろう」

風精霊が契約者を飛ばしても、魔力はほとんどかからない上に、節約魔法で皆無といっていいほどの消費なので、節約の鬼であるクリスもフウリの提案に乗る。

クリスがどんどん浮き上がり。

そして、村まであと少し。

第二話「魔法使いの過去と白い風」

「よっと」

村の少し前で、ふわりと地面に降り立つクリス。

「浮いて村まで行けばよかったじゃないですか」

「おばか！そんなこと田舎の村でやったら、僕が村で浮いてしまうだろう！」

「何をいまさら。主は浮くの得意じゃないですか」

「学院でも好きで浮いてたんじゃないだよ！？」

「学院でも・・・？ああ、村でも浮いていたんですか」

「抉らないでください・・・」

「そういえば、主の昔話を聞いた事がないですね」

「え、なに？聞きたい？」

「期待をこめた目で見ないでください。想像つくのでいいです」

「ひどくね？仮にも主だよ俺？」

「主は勘違いしていますね。そもそも人と精霊の契約は対等です、そして主のした契約ですと、私の方が若干上になります。主を主と

呼ぶのはただの趣味です、別に他の呼び方もできるんですよ、無職主。分かりましたか？」

クリスは契約魔法を弄る代わりに、クリスの魔力をフウリが好きに使っていいという条件をつけている。

ちなみに、フウリとの契約の維持でほとんどクリスの魔力はないのだが・・・

「え、あ、はい、すみませんフウリ様。お願いですから無職呼ばわりはやめてください、お願いしますお願いします」

「仕方ない主ですね」

「ありがとうございます。これからも誠心誠意フウリ様に尽くさせていただきますとも！」

「その意気ですよ主」

フウリが胸を反らして尊大に告げる。

ちなみに、フウリは今人型である。

精霊は、格が上がってくると段々人型をとれるようになる。

大きさも、人間大から手のひらサイズまで変えることが出来る。

フウリ並になると、服なども魔力で形成できる。

「まぁ、主の過去は特技から推察できます。弓が得意なのは、森で

狩猟をしていたからでしょう？」

「うん、畑耕すより向いてたみたいだから、狩のときはいつもついていってた」

「で、剣が上手いのは騎士に憧れたからでしょう？王都でもすれ違うと目を輝かせて見てましたからね」

「あはい、ちゃんばらごっこで磨きました」

「ちゃんばらごっこであそこまでの腕になるのですか、さすが主。変なところで突きぬけてますね」

「あれ、褒められた・・・？」

「褒めてますよ、えらいえらい。それで、どうせ騎士になるんだーとか言っていつも木の棒でも振り回して大きくなって、本当に王都まで行っちゃったんですね。可哀想に・・・。それは村でも浮きますよ」

現実を見ないといけませんよ、とフウリが続ける。

「あ、当たってる・・・剣買う余裕なんてなかったんだよ！木の棒で悪いか！」

「悪くは無いですけど、本当に木の棒で王都に行ったんですか・・・。ここ数日通った道、結構魔物いましたよね？」

「え、うん。木の棒で頑張った。で、王都目前で力尽きたところを、遺跡の研究に出てた師匠に拾われた」

「本当に馬鹿で可愛いですね主」

「やめて、生暖かい眼差しを送らないで・・・！」

「おっと、そろそろ村に着きますね。私はさっきから何か良からぬ気配がするので、ちょっと周辺の格の高い精霊に挨拶してきます」

「お、おい、なんだ良からぬ気配って。やばいのは嫌だからな！」

「主のやばいの基準が分かりません。遺跡であった亡霊騎士はやばいに入りますか？」

「おいおい、あれはやばいってレベルじゃないだろ・・・。フウリと俺の剣技とこの剣があって五分五分だったやないかい！・・・え、あれレベルの良からぬ気配なの？」

以前クリスが、師匠の手伝いで手付かずの遺跡に入ったときに、最下層で王の墓の守人の成れの果てである亡霊に襲われ、遺跡が崩壊寸前になるまで戦って、やっと倒したという事があった。

ちなみにクリスの剣は、王都の古びた武器屋に行ったとき、小汚い樽に十把一絡げで売っていたものだが、魔力の流れがおかしいことに気づいたクリスがとりあえず購入した。
そして遺跡マニアで古代魔法の数少ない使い手である師匠に見せたところ、古代の魔法文字が特殊な方法で刻まれており、解読できない部分も多かったが、できた部分をあわせると、
世界の魔力を吸引して吸引した分だけ切れ味がよくなり、斬撃を飛ばすことができるようになる、ということが発覚したので、ボロボ

ロだったのをクリスが得意の錬金で見栄えと、剣そのものの切れ味をよくしたものである。所持者の魔力を吸ってなんらかの効果を得る魔剣というのは存在するが、世界の魔力を吸って効果を得る魔剣というのは大変珍しいものである。

あと、魔法使いが武器屋に行くことなど滅多に無いのだが、クリスが自由にすることができるお金を得て初めていったのが武器屋だ。木の棒を振り回すのは恥ずかしいということに、王都に来て少ししてやっと自覚したそうだ。

「そうですね、あれ並なら主の腕も上がってるし、剣の魔力も満ちてるのでそこまで苦戦しないと思うのですが」

「超不安です。師匠に連絡いれたほうがいいかな」

「王都出て一週間で、ですか？」

「は、恥ずかしい。師匠泣いて見送ってくれたのに。ちょっと俺には無理だわ」

「まぁ、様子見だけでもしてきます。処理できそうなら処理しますし」

「うーい。お願いします」

「はい、お願いされました。それでは、危なくなるかもしれないので、少し頂きますね？」

「頂くって何・・・を！？」

クリスの唇にフウリのそれが重なる。

「ん・・・。ごちそうさまでした」

「おいまてそこの色情精霊」

「勘違いしないでください主。別に主に好意を持っての行動ではないですよ?ただ、魔力を頂いただけです」

「そんなことは分かってるわ!だけど別にその方法じゃなくてもいいだろ!?」

「はて?その方法とは?」

「い、いや、だから、き、き、キスじゃなくてもだな!」

「うふふ、純情ですね可愛い主。けど、これが効率いいんですよ、私にとっては」

「う、うそくさい。しかも指輪から魔力無くなってるんだけど、ねえ、なんでなんだよフウリィィイ!指輪から取るなら俺に接触しなくてもいいだろうが!!」

「それでは見てきますので、おとなしくしてるんですよ主。あんまり騒いでると、ほら村の人も変な目で見てますよ」

「スルーするな!!お前のせいだ!!早く行って来い!!怪我すん

なよ！！」

「はい、それではまた後ほど」

そう言うと、フウリの体がふわりと浮いて段々遠ざかっていった。

「ふぅ、白・・・か・・・」

第三話「魔法使いは初代騎士団長」

けしからんフウリを見送ったクリスは、村の前まで足を運ぶ。

「お、おい、お前！さっきから一人で大声だしたりしやがって！怪しい奴は村には入れないぞ！」

ちょうど村の前で遊んでいた少年たちが声を上げる。

精霊は基本、ある程度魔力を扱える者にしか見えない。

よって、フウリと話しているクリスは独り言を言ってるように見えるため、学院外でもあまり人がよりつかなかった。

フウリ並の高位精霊なら、人に姿を見せることも簡単なのだが・・・。

「怪しいだと！こんなシティボーイの俺を捕まえて怪しいだと！この田舎者が！お前じゃ話にならん！村長を呼べい！」

「ふ、ふざけやがって！この！！」

「おれたちにかなうと思うなよ！」

「ぼっこぼこにしてやんよ！」

「僕たちはトリエ村騎士団だぞ！」

「けどあの剣本物じゃない？やばくない？」

「ばっか、どうせ偽物だって」

「金持ちそうな顔じゃないだろ」

等々、少年たちは木の棒を振り上げて威嚇する。

「木の棒・・・それにトリエ村騎士団だと・・・。くそ！なんてことだ。俺の負けだ・・・。好きにしろ・・・」

少年たちが振り上げる木の棒を見て、がくりと膝をつくクリス。

ちなみに、トリエ村初代騎士団長はいま膝をついている。

「分かればいいんだ！」

「けどこの怪しい奴どうする？」

「自警団の兄ちゃんたちのところに連れてく？」

「兄ちゃんたち、村長の家に集まってたよな」

「よし！ついて来い！村長の家にいくぞ！」

結局、クリスは村の中に入れることになったようだ。

「よし、お前はここで待ってろよ！今兄ちゃんたち呼んでくるから」

そう言い残して子供たちは村長の家に入っていく。

「お前ら、何しに来た！今日は大事な話してるから、村の外で遊んでろって言っただろ！」

「ちがうんだよ兄ちゃん」

「怪しい奴を村の外で見つけたんだ！」

「それでみんなで捕まえて連れてきたんだよ！」

「凄いだろ！」

と、子供たちが自慢していたところに雷が一発入る。

「お前たちは！！また、そんな勝手なことして！！何度言えば分かるんだ！！村のお客さんかもしれないだろ！！それに本当に危ない奴だったら最悪殺されてしまうかもしれないんだぞ！！」

実際、一度旅の商人を捕まえて、こっぴどく怒られているトリエ村騎士団員は顔を青くしたり、泣いてる子もいる。

「とにかく、その人のところにすぐ案内しろ！」

「う、うん。村長の家の前にいるよ」

「わしも行こう」

村長も立ち上がって家を出る。

自然、集まっていた大人が全員ついて行く事になる。

「おお！あなたが、うちの子供たちがいたずらしてしまった人かな？」

「あーそうですね、たぶん。きっと」

「ふむ。まことに申し訳ない。この通りじゃ！」

「本当にすまない！」

そう口々に言って皆が頭を下げる。

「あの、そのですね、気にして無いというか、遠く巡って俺のせいというか・・・」

止められるのも無視して村を出た身であり、その後連絡もしなかった身であり、初代トリエ村騎士団長という身でもあるので、クリスのほうも気が気じゃない。

「おお！そう言ってくれますか！」

村長がぱっと顔を上げて喜び、頭を下げてた村の大人も顔を上げる。

「・・・あれ？」

「お？」

「んー？」

「おい」

落ち着いて見ると、村の闖入者がどう見ても見知った顔であることに皆が気づいてくる。

「お前、クリスじゃねぇか！」

「おい、クリ坊か！」

「おおー、本当だ」

「人違いです」

クリスは即否定するも、皆聞く耳を持たない。

「心配させやがって！」

「生きてたのか」

「勝手に出て行きやがって！」

「マリアンさんもジョシュもずっと心配してたんだぞ！」

マリアンとはクリスの母の名前で、ジョシュは弟の名前である。

「俺も心配してたんだぜ、団長！ププッ」

「なんだ、初代じゃないか、頭下げて損したぜ」

初代団長時代の五年ほど前は、村の客人を罠に掛けたりと、もっとひどかった。

団長は年下の団員をこき使って、村の周りに罠を仕掛けまくっていた。

「お前の仕掛けた罠にはまって、一週間臭いがとれなかったんだぞおお！」

「で、騎士にはなれたのか？」

「なれてたらここにいないべ」

「結局戻ってきたのか」

「まぁ、いま大変だし、若い働き手は居て困るもんでもないしな」

「てめぇ、貸してた色本返せや！」

「お前が出ていってからリリィちゃんが元気なかったんだからなぁあ！」

「くそ、もげろ！」

等々、熱烈な歓迎を受けるクリス。

そこに、後ろから声が掛かる。

「クリス！！」

そこには、丁度畑から戻ってきたマリアンがいた。

マリアンが大声でクリスの名前を呼び、駆け寄ってくる。

そしてその勢いのまま、あつい抱擁・・・タックルを繰り出す！

倒れたクリスに馬乗りになって殴るマリアン。

「このっ！馬鹿息子がっっ！」

「おご、ちょ、あば、母、あが」

「おいおい、そんなにすると死んでしまうぞマリアン」

村長が見かねて止めに入る。

「チッ。命拾いしたわね！」

「それが息子に向けて言う言葉か！！」

「うるさい、馬鹿息子！五年も連絡なしで！どんだけ心配したと思ってんの！」

マリアンが涙目で怒鳴る。

「あー、いや。すんませんでした！」

クリスは勢いよく頭を下げる。

「もういいわ。殴ってすっきりしたし。ジョシュはまだ畑だから、

とりあえず家で待ちましょ」

「はいさ」

「皆もお騒がせしてごめんなさいね。この馬鹿息子には、今度日を改めてちゃんと村長のところに挨拶させにいきますので」

「よいよい。積もる話もあるじゃろうて」

「さすが村長だぜ。あと村長の息子よ、色本は犠牲になったのだ」

「お、俺のお気に入りがあああああああ」

晴れ渡った故郷の空に次期村長の絶叫がこだまするのだった。

第四話「魔法使いと母と弟」

「うおおお、帰ったぞおお」

「うるさいわね、お帰りなさい」

クリスは家に入るなり騒ぎだす。

「我が家はいいね、一番だね！王都なんてほこりっぽいし、それに比べてこの村はなんて清々しいんだ」

クリスはテーブルについてくつろぎ、マリアンはお茶を入れて戻ってくる。

「あんた、王都にいたのかい」

「うん。騎士になるつもりだったからねー」

クリスはお茶を飲みつつ答える。

「うそおっしゃい。あんたが何で家を出たかなんてこっちはお見通しよ」

「う、嘘じゃねーし！騎士になるつもりだったし！」

「あの年は、ウルバが死んでから初めての不作だったかね。本当ならジョシュをどこかに奉公に出さないといけなかったのを知って、出て行ったんでしょ」

ウルバとはクリスの父、マリアンの夫である。

「う・・・。ま、まぁ、それが関係してないといったら嘘になるけど、本当にそれだけじゃなくて、騎士になりたいってのも理由だったし。そもそも、ジョシュのほうが俺より何倍も畑仕事できるからね」

「はぁ。あんたが納得してるならいいけどね、母としては複雑だわ。今からでもジョシュと土地半分ずつとかしない？」

「そんな慣習作ると村の人たちに睨まれるからやめとくよ。ジョシュは家の農地をちゃんと相続したんでしょ？」

「ぐずったけど、村長にも話して、ちゃんと相続させたわよ。村長もうすうすあんたが出て行った理由気づいてたみたいだけど黙っててくれてね。ジョシュは年齢的にはちょっと早かったけど、体でかいし体力あるから大丈夫だろうって、村のみんなも説得してくれたわ」

「ああ。ジョシュはでかかったからなぁ」

「あれからもっと大きくなったわ」

「え！？何食ったらそんなにでかくなるんだよ！」

「あんたと同じ物食べさせてたんだけどねぇ」

「身長の格差社会や！」

「主もそこまで小さくはないでしょう」

「弟より小さいだけで俺のプライドはズタボロなんだよ・・・」

「主のプライド・・・？ああ、あれですか、遺跡でよく捨ててますよね」

「プライドなんて遺跡じゃ邪魔なだけだよな」

「さすが主です。早さに自信のある私も、あんな見事な逃げっぷりは真似できません」

「毎度毎度抉り込むように言葉の暴力を振るってくるな・・・ってあれ？」

「どうしました、主？」

「何、さも当然のように会話に混じってるの」

「やっと気づきましたか、鈍いですね主。それだから、女性との出会いも見逃すんですよ」

「最近、フウリの罵倒に慣れてきた自分が怖い」

「変態主ですね、無職と並べるともう手の施し様がないですね、ご愁傷さまです」

「えーっと、馬鹿息子。そこの綺麗なお嬢さんはだれだい？！」

突然現れた美女に驚いて、固まっていたマリアンが再起動してクリスを問いただす。

「これはこれは。挨拶が遅れまして、大変失礼いたしました。私、主と契約させていただいております、フウリと申します。未熟な身ではありますが、誠心誠意クリス様に尽くしていきますので、どうかよろしくお願い致します」

「ちょ、馬鹿！フウリ！大事なところが抜けてるよ！？」

「何が大事なところよ！馬鹿息子！都会に行って帰ってきたと思ったら、こんな別嬪さんと契約して主なんて呼ばせるなんてどういう了見だい！もう少しお仕置きが必要なようね！表に出な！」

「勘弁してくれえええええ」

「ふむ、大事なところですか、主・・・ああ！そうですね、誤解を招いてしまいました。失礼しました。主とは契約してますが、ほとんど対価も頂いておりませんよ」

「違うよおおお！？そうだけど、違うよおおお！！？」

「あ、あんたって子は・・・！そんなことする子じゃないと思ってたんだけどねぇえ！？都会に行って根性が腐っちまったのかね！」

「おいいいい！信じてくれよ母さん！ってか、フウリも悪ふざけが過ぎるって！」

「ふむ、すみません、主。お母様も途中から気づいてるようでしたので、少し悪乗りしてしまいました」

「母さんもぐるかあああああ！」

「ふふふ、あんた中々面白い娘さんを連れてかえってきたじゃないのさ」

「主をからかうのは私の趣味ですので」

「ここに味方はいないのかあああああ！！」

「そんなことより、この娘さんとはどんな関係なんだい？」

「そんなことって軽く流さないで・・・」

「私は主と契約した精霊兼嫁です。お義母さま、これからよろしくお願い致します」

「あら！まあまあまあ！こちらこそこんな馬鹿息子ですが、可愛いところもあるので、見捨てないでやってくださいね」

「おいいい！精霊が嫁とか聞いた事ねえよ！？そんな契約してないからね！？」

騒いでいると、玄関が開く音と共にどたどたと慌てたような足音が響く。

「母さん！兄さんが帰ってきてる本当！？」

「本当よ、ほらここに」

マリアンがクリスを指差すと、クリスの弟、ジョシュがクリスをロックオンする。

そして一息に間合いを詰めると、クリスを力一杯抱擁する。

「兄さんっっ！生きててよかったよぉぉぉ」

「ああ、心配掛けたなって痛い痛い、馬鹿、絞めすぎだあああああ」

「に〝い〝さ〝ぁ〝ん〝～」

「聞いてねぇぇ！おいまじで体格差考えろおおおお！ギブ！ギ・・・ブ・・・」

段々、動かなくなっていくクリス。

「こら。ジョシュ、クリスがぐったりしてるから離しな！」

「うあああ、ごめんよ兄さん！嬉しくてつい」

「はぁはぁ。殺す気か！」

「ごめんよぉ」

「ああもうわかったから涙目になるな鬱陶しい」

「うん・・・」

しゅんとなるジョシュ。

それを見て、クリスはため息をつきつつ、ジョシュの頭を撫でる。

「すまんかったな、家のこと全部任せちまって」

「に、兄さん！そんな、僕のほうこそ！」

「ああまた抱き着こうとするな」

「う、ごめんなさい」

「はいはい、もういいから、とりあえず畑仕事の泥落としてこいよ」

「うん、洗ってくる」

そういって、ジョシュは家の裏の井戸へ向かう。

「相変わらずだなぁ、あいつは」

「あんたが出て行った理由も、最近気づいたみたいでね、少し落ち込んでたのよ、あれでも」

「主が家を出た理由ですか？騎士になるためでは？」

「あら、お嫁さんにも何も話していないなんて、いけない子だわね、あんたは」

「おいちょっとまってください、嫁じゃねぇですよこいつは」

「また、そんな照れちゃって。こんな息子だけど結構家族思いなのよ、家を出た理由だって本当は」

「おおおっと、そこまでだぜお母様」

「主は黙っていつも通り壁の花になっていてください」

「ひどいわ！パーティーでもいつの間にか壁際に移動してる俺に向かって！」

「で、あの子が家を出た理由なんだけどね・・・って理由なのよ」

「まあ、主は家族思いなんですね、そういえば学院でも女の子に言い寄ってた貴族に・・・それで・・・あれで・・・」

「キャッキャッ」「ウフフ」

・・・・・・・

弟が戻るまで、部屋の隅でいじけている魔法使いの姿があったとか・・・

第五話「魔法使いとドラゴン？」

話をしていたら、いい時間になったので、マリアンが夕飯を作り、皆で食卓を囲む。

「で、兄さん、フウリさんとの関係は良く分かったんだけど、結局五年も何してたの？」

夕飯を食べながら、ジョシュがクリスに尋ねる。

ちなみに、精霊であるフウリは特に食べ物を食べる必要はないのだが、少しは食物の魔力を取り込むことができるから、という言い訳でクリスが同席を求める事が多かったため、最近では魔力以外にちゃんと味を感じることができるようになった。

クリスとしては、一人で食べるの寂しいというのが本音である。

「王都の魔法学院で学生してました。超優等生だったんだぜ」

「さすが、兄さんだね！」

ジョシュは、昔から兄の言うことを無条件で信じるのである。

「本当に、さすがですね主」

「あ、やめて。ごめん、嘘だから。実は卒業もぎりぎりでした」

「あんたは昔から、ジョシュを騙し切ったことはないわよねぇ」

ジョシュの純真無垢な瞳に弱いクリス、嘘をついても結局嘘だと言うか、その嘘を真実にしてしまう。

「くそ！そこはいつもなら、フウリが痛烈なツッコミをするところなのに、俺の弱点を的確に突いてくるなんて・・・いつも通りか」

「平常運転です」

「本当に仲がいいんだね、二人は」

「夫婦ですから」

「夫婦じゃない！」

「主従と言ったほうがよろしいですか？主」

「え、あ、うん。そう言われると、契約内容があれだし、ちょっと困っちゃうわ」

「父親に似て煮え切らない男だね、あんたも！ちゃんと責任とりな！」

「おおおい！？責任ってなんだよおおお」

「主、契りまで交わしたのに、そんな・・・」

「まてやこら！契りって契約だろが！なんか変なふうに聞こえるから！ただの、魔法使いと精霊の契約だろ！」

「あはは、まあまあ。兄さんも熱くならないで。フウリさんも兄さ

んをあんまりいじめないでね？」

フウリがクリスをいじって、マリアンが煽って、クリスが爆発して、ジョシュが宥めるローテーションで食事の時間が過ぎていく。

「結局、あんたは冒険者しつつ学生してたのかい？」

「うん、学生が本業で、冒険者はお小遣い稼ぎだね」

「なら、兄さん魔法も使えるんだ！すごいなぁ」

「あんた、あんまり危ないことはするんじゃないよ？冒険者なんて乱暴者も多いって言うし」

「大丈夫です、お義母さま。主は、剣と弓の腕では冒険者ギルドでも一目置かれ、難易度高い討伐も何度かこなしていて、そっち関係ではかなり有名人です。逆に、魔法使いと言ってもだれも信じてくれませんが」

「そういえばこの子、昔から木の棒で魔物しばき倒してたからねぇ」

「兄さん強いもんねぇ」

「しみじみこっちみないでくれますか！？魔法使いなんだよ！一応！ギルドの登録も魔法使いなのに、それっぽい依頼一度も受けた事ないけど！！フウリと契約してからは、本当に全然使って無いから腕が落ちてないか超心配なんだけど！」

実際、錬金以外の魔法はフウリ任せが多く、クリスはギルドだとドラゴンキラーの称号を持っているため、凄腕剣士として扱われてお

り、魔法は、使えるらしい？くらいにしか思われていない。

ちなみにドラゴンキラーは、ドラゴンを討伐したときに国から与えられる称号だが、国の騎士はほとんどもっている。

騎士団のドラゴン討伐ほど醜い狩は無いと言われているが・・・

何人で倒しても参加すれば貰えるため、騎士の虚栄心を満たすものというのが一般の認識となっている。

しかし冒険者でもっていると、その冒険者の実力を示すものとして、ぐんと価値があがる。

「そういえば、騎士団からもお誘い受けてたのに、何でそっちに行かなかったんですか？」

「うん？だってお前、魔術学院入れてもらったのに、卒業して騎士団入りましたとか滑稽だろ！師匠にも顔向けできないし！あと実際見た騎士団はちょっとなぁ」

「あのお師匠さまなら、笑って許してくれそうですけどね。逆に無職のほうが心配してると思いますよ。まぁ、主が騎士団入るって言ってたら私は実家に帰ってましたけど」

「師匠には心配掛けてばっかりだなぁ、今度遺跡潜って、また貢物でも献上するか。あとお前の実家と言えばあの空の島か、さすがにもう行きたくないぞ・・・」

クリスとフウリが話している横では、マリアンとジョシュが呆れ顔だ。

「あんた、本当に危ないことは程々にしなさいよ」

「兄さん、ダメだよ、危ないことは。兄さんが怪我したりしたら悲しむ人がいるんだからね」

「あはい、すんません、気をつけます」

兄が落ち込んだことを感じて、ジョシュが明るく言う。

「けど、兄さんの冒険の話聞きたいなー」

それに喜ぶクリス。

「そうかそうか！じゃあまずは、国境付近で暴れてたドラゴンを退治した話をしよう！あのときは本当に大変だった、敵国の軍隊まで出張ってきて」

「そして、敵国の軍隊がドラゴンを切り倒す主を見て、逃げ出して行きましたよね。おかげで今、相手の国とは停戦交渉中です」

「いや俺のせいじゃないだろ、停戦交渉は」

「いえ、聞いた話だと、あのときの軍隊に敵国の王子がいたらしく、帰って早々見てきたことを報告したら、王様が泡を食って停戦を要請したらしいですよ」

「だからか、なんかあの依頼以降、国からおいしい仕事が・・・」

報酬のほとんどは、クリスの師匠への貢物や、錬金の素材で消えて

いる。

「お師匠さまが名前とかは隠してくれたみたいですけどね、ギルドも主には借りがありますから、しっかり情報統制してくれたみたいですよ」

「なるほどなー。しかし、なんで俺の知らないことをフウリが知ってるのか、とても疑問なんだけど」

「気にしないでください、趣味の範囲です」

「多趣味な精霊だなおい！」

マリアンとジョシュは呆然と二人の話を聞いている。

「兄さん・・・戦場に行ったの？」

ジョシュが心配そうに言う。

「あんた、ほんと無茶ばっかりだね・・・」

マリアンが、呆れ切った顔をする。

「俺ですが、家族の視線が痛いです」

「ドラゴンなんて序の口じゃないですか」

「おいやめろ、もう少し刺激の少ない話をしよう」

「じゃあ、騎士団を闇討ちした話ですか？」

「過激すぎるだろ！！」

「そもそも、刺激が少ない話が出てこない件。人間相手な分、騎士団闇討ちが一番刺激が少ないですよ」

「おいいいい、あるだろなんか！俺も思いつかないけど！ああ！あれだ。王城忍び込んだときのやつ！あれなら特に問題ないだろ！」

「王様に一撃いれたあれですね」

「あ、ごめん、やっぱなし」

「あああああ、あんた！そんなことしたのかい！？」

「兄さんそれはさすがにまずいんじゃ・・・？」

「おいいいいい、違うんだ、俺はやってないいいいいいいいい」

魔法使いの絶叫が響く中、夕食の時間が過ぎていった。

第六話「魔法使いの剣の秘密」

「くそ、なんだ、この五年！本当にろくなこと無いぞ！」

夕飯を食べ終わって、クリスは五年ぶりの自分の部屋でごろごろしている。

「私との出会いをお話すればよかったのでは」

ふわふわ浮きつつ、フウリが言う。

「・・・！あれならちゃんと冒険してるし、別になんか倒した話じゃないし、とっても食卓向けの話だったんじゃね？なんで早く言わないし！」

「ええ、そうですね、すみません。あの島に来るのに遺跡一個無くなってますけど、一番まともな話ですよね」

「ああ・・・嫌な・・・事故だったね・・・」

「お師匠さまが涙目だったじゃないですか」

「やめて、あの顔思い出すと今でも罪悪感がひしひしと！」

「ダメな主ですね」

ベットに顔を埋めているクリスを見ながらフウリが続ける。

「ところで、あの良からぬ気配についてですが」

「おお、そういえば何か分かったのかい！」

「ええ。ちょっとやばいことになってます」

「え。なにそれこわい。亡霊はもう勘弁」

「私は亡霊のほうがまだいいですけどね」

「お、おい、やめてくれよ。亡霊のほうがましって、もう俺個人でどうにか出来るレベルじゃなくね！？」

「落ち着いてください、主。大丈夫です、私にとっては都合の悪い相手なだけで、主なら一刀両断です」

「一応魔法使いなんだけどね俺。まあ倒せるならなんでもいいや・・・」

「さすが主。それでそのやばい奴なんですが・・・魔力食いです」

沈黙が部屋を支配する。

「・・・。おいいいいいいいいい、まじもんでやばいやないかあああああ！」

魔力食いとは、その名の通り魔力を食べる、魔物の突然変異である。

魔力食いは、世界から一切の魔力を吸収できず、そのため、生物がもっている魔力を食べて力をつける、特に精霊が好物で、精霊食いとまで言われる。実際、精霊食いというのは別にいるのだが、人間

から見た被害はどちらも天災レベルなのであまり区別されない。
どちらも、放置して精霊を食べつくされてしまうと、不毛の大地ができあがる。

「まだそこまで精霊も食べられていないそうなので、明日にでも倒しにいきましょう」

「え、倒せるのあれ。くそ珍しいし、俺見たことも無いんだけども」

「主の剣なら、切れ味抜群ですよ。切ればあいつの魔力も吸って切れ味がドン！更にドン！切り刻みましょう」

「フウリさんテンションおかしくね？そもそもうちの剣、他の生物の魔力吸えたっけ？」

「いやですね、主。私はいつも通りですよ。ただちょっと同族が食べられてイライラしてるだけです。あと、主の魔剣はそもそも主の魔力を吸うこともできますよ？ただ、主が素寒貧だから世界の魔法を吸ってるだけです。切れば生物の魔力も吸収します。だからドラゴン切ったとき切れ味やばくなったじゃないですか。本当にあの大きさのドラゴンを一刀両断するなんて、そりゃ停戦したくもなりますよ」

「ああ、怒ってるのね。まあ、俺もむかつくし、切ろうか。ってか、この魔剣すごかったんだな・・・。てっきりちょっと珍しいだけかとおもってたわ。ごめんよ」

「明日、切り刻みましょう。というか、魔剣については、私より長い相棒なんですから、正確に把握してあげてください」

「はい、すんません。けど、刻まれた古代魔法文字は難解すぎてで、師匠だって解明できないところ多いし！剣振ってるときは、切れ味増したなぁと思うことはあったけど、俺の隠された力がピンチで覚醒したんだなってくらいにしか思って無かったです、すんません。」

「てっきり知ってるものかと思ってましたが。主に隠された力は一切ないので安心してください。ピンチになっても、魔剣にあげれるほど魔力もないですしね」

「ぐぬぬ。指輪の魔力もまた集めなおしだし、ってか結局魔力使ったの？」

「ああ、主に接吻して頂いた魔力ですね、ちゃんと使いましたよ、半分食われて消滅しかかってた精霊に」

「接吻って・・・。まあ使ったならいいや」

「ふふ、赤くなって可愛い主」

「おい、やめろ、くっついてくるな」

「しかたないじゃないですかー、あるじのへや、ベットいっこしかないですしー」

「棒読みはやめろ！別に浮いたまま寝れるだろうが！そもそも睡眠いらないだろ！」

「まぁまぁ、主。私も長旅で疲れているんです。接触してれば効率的に魔力を摂取できますし、主の節約にもなるでしょ？」

一応、契約して魔力を渡している場合、契約者と非契約者が離れていると、到達するまでに微弱な魔力が世界に放出されている、と言われている。

「くっ・・・分かったよ。もう寝よう」

「はーい、主。おやすみなさい」

「おやすみ。フウリ」

・・・・・・

「（ちくそう！柔らかいものが当たって寝れない！！）」

翌朝。

「結局ほとんど寝れなかった・・・」

クリスは隈ができた顔でベットから出て顔を洗いに行く。

「主、寝不足ですか？いけませんよ、素人ではないのですから、戦いの前に夜更かしなんて」

「お前のせいなんだよ！？」

「ふむ。刺激が強すぎましたか」

「狙ってやるなよおおおお」

クリスとフウリはいい合いしつつ食卓へ。

「おはよう母さん」

「おはようございます、お義母さま」

「はい、二人ともおはよう」

クリスは、大きな弟の姿が見えないことに気づいて母に尋ねる。

「あれ、ジョシュは？」

「もう畑にいったわ」

「うお、早いな」

「あの子、お兄ちゃんがいつ帰ってきてもいいように頑張ってたのさ」

「ったく、あいつは・・・」

「ふふふ、いい弟さんですね、主」

「うっさい」

マリアンが微笑ましそうに二人を見る。

「ほら早く食べちゃいな」

「うぃーす。いただきます」

「いただきます」

「私もそろそろジョシュの所に行くから。あんたは村長に話をしてきな。あとリリィにも顔見せに行くんだよ、あの子はあんたのことすごい心配してくれてたんだから」

リリィとはクリスの幼馴染で、何かと変わっていたクリスの面倒を良く見てくれていた。

「あいあい。そのあと少し森のほうに行くからー」

「森のほうは、今危ないからやめときな。なんか見た事もない魔物が出るらしいから。そのせいで、昨日も村長の家に猟師とか自警団が集まってたんだよ」

「なるほど。まだ食われた人とかいない？」

マリアンがクリスを鋭く睨む。

「食われた人はいないけど・・・あれは人を食うのかい？というか、

あんたあれの正体がわかるのかい？」

「あ、あはは。ちょっとやっかいな魔物だけど、何度か倒したことあるから、今日にでも始末してきちゃうよ。村の人が食われたら嫌だからね」

「危ないことはしないで欲しいんだけどねぇ。まぁ、あんたがそう言うなら信じるわよ。そのこと、村長には言っていきなよ」

「りょーかいしました、まっかせといてよ！」

「はいはい、それじゃ行ってくるからね。怪我するんじゃないよ」

「いってらっさいー」

「いってらっしゃいませ」

マリアンを見送ったクリスとフウリは、食事を済ませ、支度をする。

「魔剣って、切った奴の魔力も吸収できるんだよなぁ・・・。これ応用できれば、魔力の上限を増やせなくても、吸収速度をアップできそうだなぁ。うーん、取り込む術式に節約魔法を織り交ぜて、小さい作用で大きい魔力を得れるように・・・、まずは魔剣を改造して・・・」

「主、考えるのもいいですが、早くあいつを切りに行きましょう」

「あ、はいはい、大分怒ってるね」

「ええ、同族を食べられて黙ってはいられません。昨日助けた精霊

も手助けしてくれるらしいです。火精霊で、魔力食いに棲家の洞窟を奪われたらしいです。私、火精霊とは相性いいので、丸焼きにして切り刻みましょう」

「怖いよ！？」

「ところで、さっきさらりと嘘ついてましたね」

「倒したことがあるくらい言わないと、心配されるだろ」

「そうですね、いい嘘だと思いますよ。馬鹿正直だった主が、ちゃんと嘘もつけるようになってうれしいです」

「へいへい。んじゃ行こうかね」

「まずは、村長さんのところでしたね」

そうして、魔法使いは家を出たのだった。

第七話「魔法使いと魔力食い」

フウリを待たせて、村長の家の玄関をまたぐ。

「ちわー」

「挨拶くらいちゃんとせんか！」

いつも集会をしている部屋にクリスが行くと、昨日とほぼ同じ面子が集まっていた。

「すんません。それで、村長。昨日は言いそびれましたが、少しの間村に滞在したいのですが、よろしいですか？」

「う、うむ。それは問題ないが。敬語を使われるのも、ちとむず痒いのぉ。というか、滞在なのか？住まないのか？」

「ええ。王都の学校を卒業したので、家族の様子を見に帰えってきた次第です。少ししたら王都に戻ろうと思います」

途端、ざわめきが広がる。

「王都の学校だと！」

「嘘だろ・・・」

「木の棒しか持たないで出て行ったって話なのに」

「王都の学校で雑用してただけなんじゃ」

「俺の色本・・・」

村長が一喝する。

「静まらんか！」

すぐに静寂が戻る。

「して、王都では何を学んだのだ？」

「魔法について少し」

「む、そうなのか、てっきり剣術だと思ってたのだがな、あと喋り方はいつも通りでいいぞ」

「ひゃっほい！敬語とかあんまり使わないから疲れるんだよね！」

クリスは村長の言葉を聞いて、すぐにはっちゃける。

「はぁ、お前という奴は・・・。まぁいい。お前が望むなら村の空家を貸してもいいから、村に残る気はないか？」

村に魔法使いがいれば、実力なんて無くても、何かと役に立つし、字の読み書きが出来るというだけで貴重なのだ。

「うーん、まだやり残した研究もあるし一度王都に戻るよ。師匠にも恩返ししたいしねー。けど暫くはいるつもりだし、戻った後もちょくちょく帰ってくるよ」

「そうか、残念だが、仕方ないか」

「すんません」

「よいよい。ところで他の者には挨拶してきたのかの？リリィは特に心配しておったんだぞ？」

「このあと行って来るよ」

「ふむ、この時間なら、皆畑だな。ちゃんと顔を見せに行くんだぞ」

「はーい。あ、それと村長、森になんかいるじゃん？あれの件なんだけど・・・」

クリスが本題に入ろうとしたところで、部屋のドアが開く。

「村長！大変です！」

件のリリィの妹、ユリィが息せき切って入ってくる。

「どうした、ユリィ！？」

「ね、姉さんが、森に入った子供たちを追って森に！」

集まっていた村人が騒ぎ出す。

子供たちとは、騎士団の面々である。

「子供っていうとあの悪ガキどもか！」

「な！森は今やべぇんだぞ！」

「化け物がうろついてんだ！」

「すぐ呼び戻しにいかないと」

「けど、魔物だって何体も食い殺されてるんだぞ、俺たちで行っても・・・」

「おい！子供を見捨てるってのか！」

村長が立ち上がる。

「静まれ！」

「だけど、村長！」

「おぬしらが騒いでも仕方ないだろう！すぐに若いもん集めて森に行くぞ」

「あ、村長」

クリスが声を上げる。

「クリス、今状況を説明している暇がないんだが、森に一緒に来てくれんか？」

「ああ、森に行くのはいいんだけど。先に行くから、村の人は森の入り口で待っててもらえないかな」

「おい、何言ってるんだ！今、森には化け物が！」

「正体も分かってるから。ちゃちゃっと倒しちゃうからさ。森の入り口で子供たちを頼むわ」

「しかしな！」

言い募る村人を押し戻して、村長が決断する。

「分かった。子供たちとリリィを頼む」

「村長！？」

「クリスの弓の腕は、おぬしらも知ってるだろう。魔法も使えるんだ。わしらがいても邪魔なのだろう」

「村長がそう言うなら・・・」

村人たちは村長の説得にしぶしぶ引き下がる。

「そんじゃ行って来る」

クリスはそう言うと何か呟き、瞬間村長らの目の前から掻き消えた。

フウリは、村娘が村長の家に駆け込んだとき、クリスに契約を通し

て話かけていた。

『主、何やら慌しくそちらに向かった娘がいましたよ』

『うん、今ちょうど来たね』

少し途切れてから、クリスが慌てて言う。

『まずい！子供が森に入ってそれを追って娘も一人入ったらしい！』

『森は魔力食いの狩場になってますから、危険ですね』

『すぐ追いつくから、先に行って子供たちを探してくれ』

『分かりました』

フウリは浮き上がると、急いで森に向かう。

フウリは森に着くと、昨日助けた火精霊の戦っている気配がすることに気づく。

『主、昨日助けた精霊が戦っているようです。たぶん相手は魔力食いですね。人の気配もします』

『すぐ行ってくれ、俺もフウリを目印に向かう』

『分かりました』

フウリは戦いの気配がするほうへ急ぐ。

クリスも、フウリの補助が無い中、なけなしの魔力を使い高速で移動する。

「頼むから、無事でいてくれよ！！」

魔法使いは祈り、さらに加速する。

第八話「魔法使いの幼馴染」

火精霊が魔力食いと戦っている後ろで、子供たちが泣きじゃくり、村娘がなんとか子供たちを逃そうとしている姿がフウリの目に入る。

フウリは急降下しつつ、魔力食いに風の刃を無数に叩き込む。

ふわりと、フウリが火精霊の前に降り立ったときには、魔力食いがいたところは、地面が抉れ土煙が立ち込めていた。

「間に合ったようで良かったです。そこの娘、子供たちは全員いますか？」

村娘、リリィは目の前で起きた事象に一瞬呆然とするも、すぐにフウリの質問に答える。

「は、はい、皆います！」

「それでは、急いで逃げてください。私たちが足止めしますので」

土煙がはれてくると、うごめく影が見える。

「分かりました！ほら、皆立って！逃げるよ！」

しかし、子供たちは泣きじゃくり、なかなか移動しようとしない。

そして、魔力食いが襲い掛かってくる。

魔力食いは、オークの変異のようだがほとんど原型を留めておらず、

体中から黒い霧のようなものを撒き散らし、腕を振り上げて攻撃してくる。

「く、存外早い攻撃ですね・・・！」

避けると、後ろにいる子供たちに当たってしまうため、避けるわけにも行かず、フウリは魔力食いの攻撃を風で防ぎ、いなしている。

火精霊も隙を突いて攻撃するが、消耗が酷く有効打にならない。

「魔法に対する耐性も半端ないですねぇ・・・まぁ私は時間稼げばいいので」

そう言うと、フウリは突風を起こし魔力食いを吹き飛ばす。

しかし、魔力食いはすぐに木を蹴って戻ってきて、腕を振り下ろし攻撃する。

「守りながら戦うのは久しぶりです。主はあまり守らせてくれませんからね。しかし、もう終わりです」

フウリは魔力食いの攻撃を風で受け流し、体勢が崩れた隙に風の刃を数発叩き込み、足止めする。

瞬間、魔力食いの姿がぶれたかと思うと、真っ二つになり崩れおち、黒い霧となって消えていく。

成り行きを見ていたリリィは何が起きたか理解できなかった。

「遅いです、主。落第点です」

魔力食いの消え去った後にはクリスが立っていた。

「厳しいな！フウリがいないし、魔力もろくにない状態で、こんな急いできたのに！むしろピンチに来て颯爽と悪を倒した白馬の王子さまじゃないか！っていうか本当に切れてびっくりだわ！なんか黒いの出てたけど、呪われないよね！？もう呪いは嫌なんだけど！」

「次からもう少し早く来てください、危うく本気を出すところでした。あと、主の剣なら切れるって言ったじゃないですか。呪いは分かりませんが、魔剣が粗方吸ってたようなので、もしかしたら何かあるかもしれないですね。よかったですね、主」

「おいいいい、無理無理！魔剣何食ってるのおおお！ダメでしょ！ぺってしなさい！」

剣を振り回すクリス。

そこで、リリィと子供たちに気づき襟を正す。

「ま、まぁ、なんにせよ、無事でよかった。皆怪我はないかい？リリィも久しぶりだね？」

クリスはところどころ服がぼろぼろになり、枝が刺さっていたり、顔に傷ができてる。

そんなぼろぼろの状態でリリィに近づくと、キザったらしい笑みを浮かべ手を差し伸べる。

「主、その顔は気に障るのでやめてください」

「おま、気に障るってひどくない！？」

目を白黒させたリリィがやっと答える。

「えっと、そこの女性が守ってくれたので皆怪我は無いですけど」

そして、落ち着いて助けてくれたであろう青年の顔をみる。

「・・・あ、あー！クリス君！あれ！？何でいるの！？帰ってきたの！？その女の人だれ！？っていうかさっきの化け物なに！？どうなったの！？」

リリィは村でも元気がよく、その容姿と相まって結構村の男にも人気がある。

「おっと、帰って村長に報告しないと」

しかし、疲れているところでこの質問攻めに答えるのは面倒だとクリスは判断し、踵を返す。

「ちょ、ちょっと待ってよ！置いてかないでよ！」

「後は任せた、フウリ」

「面倒を押し付けないで下さい」

「め、面倒ってどうゆうこと！？クリス君！」

「俺、ここまで超特急で来て、本当になけなしの魔力まで使ってふ

らふらなんだよフウリ」

「私も疲れました、帰って寝たいです」

「お前寝ると回復するのか・・・？」

「するわけないじゃないですか、気分です」

「ですよねー。んじゃ、二人で帰るか。家まで飛んでく？」

「いいですね。面倒事はいつも後回しにする主のその姿勢、私は好きですよ」

「うがあああ！無視するなー！」

「うがーって年頃の娘が上げる声じゃねえぞ！慎みたまえ！」

「そうですね、うるさいですよ娘。主との癒しの時間を邪魔しないでください」

「ふ、二人してなにさ！そんな怒鳴らなくてもいいじゃん！っていうか説明してよー！」

「俺は毎回あんまり癒されないんだけど、どうなってるの」

「仕方ない主ですね。今度とびっきりの癒しを私が提供しましょう」

「お、なになに？精霊の癒しなんて、俺想像つかないなぁ」

「無視しないでよぉ」

「落ちるのと、上がるの、どっちがいいですか?」

「おいまてや、なんか不吉な感じがするぞ・・・?」

「いえ、ただ急降下するか急上昇するかの違いですよ?どっちもがいいんですか?主も欲張りですね」

「あぶねぇよ!?癒されねぇよ!?欲張らねぇよ!?」

「私はそれをすると癒されます」

「お願いだから無視しないでぇ」

「やっぱ、癒されなくていいわ・・」

「我がままな主ですね」

「ううう・・、クリス君が数年ぶりに帰ってきたと思ったら、私を無視して知らない女の人といちゃいちゃしてるぅぅぅ」

黒い霧が晴れ、森はにぎやかになってきた。

第九話「魔法使いの飴」

やっと泣き止んで周りの状況が理解しだした子供たちに、クリスがいつも持ち歩いている飴をあげることで収拾を図る。

「ほら、王都でも有名なお菓子屋の飴だぞ！一個ずつやるから並べー。みんな食べたら出発だ」

「さすが主。昔は年下しか遊び相手がいなかっただけあって、そういうことは上手いですね」

「ど、同年代の友達もいたわ！」

「え？」

クリスから飴を貰おうと列に並んでいたリリィが疑問の声を上げる。

「いい度胸だ、お転婆娘！おまえにはやらん」

「ああ！嘘嘘！クリス君友達いっぱいいたよ！本当だよ！」

必死にフォローするリリィ。

「ところでフウリ、火精霊は大丈夫なのか」

「はい、先ほど指輪に少し溜まっていた主の魔力を頂いて、渡しましたので消滅はしないでしょう。あとは魔力食いもいなくなったので、元の棲家にいれば、すぐ回復するでしょう」

契約していない人と精霊が魔力のやり取りをするより精霊同士でやり取りをしたほうが楽なので、クリスはフウリに火精霊の面倒を任せていた。

「あ、あの、クリス君、私も飴ほしいなー、なんて」

「ならよし。フウリ、火精霊をその棲家に運んできてくれるか？」

「分かりました。運び終わったら主の所に行ったほうがいいですか？」

「うーん。たぶん村長の家で説明会だから、フウリは先に家に戻って休んでていいよ」

「あの、飴・・・」

「また、私が倒したことにしようとしてますね」

「てへ」

拳を頭にのせ、舌を出すクリス。

「気持ち悪いです主」

「すんません」

「うう・・・またクリスくんがー！」

「うるさい子だな！ほら、飴あげるからちょっと黙ってなさい」

「やった！」

嬉しそうに飴を手に取るリリィを見てため息を吐くクリス。

「見た目だけ大きくなって、中身はあのままなのか」

「んー？」

リリィは飴に夢中で聞こえていない。

「なんでもない」

もう一度、クリスはため息をつくとフウリに向かう。

「んじゃ、そっちは頼んだ。こっちは、フウリさんマジ半端ねぇっす、って感じにしとくから」

フウリが呆れたように言う。

「たまには自分の手柄にすればいいじゃないですか。私は人間に尊敬されるのも畏怖されるのどうということはないですが。主が下に見られるのはあまり我慢できないんですよ？」

「ドラゴンキラーでお腹いっぱいなんだよ！あの時だって決闘申し込んでくる奴とか、闇討ちまがいに狙ってくる奴とかいて大変だったんだから・・・」

やたらプライドの高い王都の騎士団員が、新しいドラゴンキラーが冒険者だと聞いて闇討ちするも逃げられ、その数日後に逆に闇討ちされたとか・・・

精霊に対抗意識を燃やす人間はまずいないので、手柄をフウリのものしたほうが波風が立たないとクリスは思っている。

「まぁ、いいでしょう、分かりました」

「助かるわ。さすが我が精霊さま、愛してるぜ」

「はいはい。それでは火精霊を運んできますので」

嬉しそうな顔をして、火精霊を抱えるフウリ。

「ほい、気をつけて」

「よし、こっちも行くぞー。森の入り口に村長たちがいるから、さっさと安心させてあげるぞー」

「ふぁーい」

飴を口にいれながら返事をするリリィ。

子供たちも、甘いものを食べて元気が戻ってきて、立ち上がって歩き出す。

「なぁなぁ兄ちゃん、その剣本物なのか!?」

「触らせてくれ!」

「あのお姉ちゃんたち大丈夫かな？」

「あ、あんな化け物、僕一人でも退治できたし！」

「お前泣いてリリィ姉ちゃんにしがみついてたくせにー！俺は泣かなかったぜ！」

「なんだとー！」

「ねぇねぇ、クリス君、飴玉もう一個頂戴？」

子供たちプラス1が騒ぎながら森を移動する。

「この剣は一応本物だぞー、ただ今抜くと呪われそうだから抜けないけど。あのお姉ちゃんたちは心配ないよ、家に帰って休めば良くなるんだと。あんな化け物一人で退治できるなんてすごいなー、けどこれから村長たちによる地獄のお説教大会で坊主が退治されちゃうかもなー。あとそっちの坊主は泣かなかったかもしれないけど、ズボンの染みをどうにかしような。そしてリリィ、再会して早々こんなこと言うのもなんだけど・・・」

「え、なに？告白？さすがに急すぎるよ？私困っちゃう」

「あー、うん。お前五年前と全然変わってないなー」

「そ、それどういう意味？」

「可哀想に・・・」

哀れみの視線をリリィに送るクリス。

「え?え!?どうゆう意味さ!?」

リリィを無視してクリスが子供たちに視線を向ける。

「さーて、入り口が見えてきたぞー。坊主ども、しっかりこってり怒られてこいー。ついでにリリィも怒られろ!」

「わ、私怒られないよね?助けに行っただけだもんね!?」

「さぁなぁ。っと、村長ー!」

クリスは、前方に見えてきた武装した村人たちの先頭にいた村長に手を振る。

村人たちは急いでクリスたちのほうに駆けてくる。

「く、クリス!みんな無事か!?」

「うん、みんな怪我も無し。健康そのものなので、しっかり頼みまーす」

「うむ、引き受けよう。しかしとりあえず、村まで戻らんとな。子供たちの家族も心配してるしの」

村長先頭で、子供たちを囲うようにして村に戻る。

「これは久々に腕がなるぜ・・・!」

「初代以来の大仕事だな!」

「初代は更生できなかったからな、こいつらはあんなことにはさせない・・・！」

「もちろん、リリィも一緒に説教だな。あのお転婆娘が！」

「ローテーションは、いつも通りでいいか。まずは両親、次に村長、あとは順々にいこう」

等々、説教に妙なやる気を見せる大人たちに囲まれ、青い顔をする子供たち、プラス1。

「ね、ねぇ、クリス君。私も説教されそうなんだけど。た、助けてくれないかなーなんて」

「しっかり受けておいで。骨は拾ってやるから」

「み、見捨てないでよぉ」

リリィはクリスの袖を掴む。

「ま、命があっただけいいじゃないか！あれも慣れてくるとなかなか赴きがあるよ。俺はもう一生分受けたから全力でお断りだけど！」

「だ、だけど。一応私は、皆を助けに行ったんだよ！」

「結果、家族にも村のみんなにも心配かけたんだぞ」

「むぅ！クリス君だって、村出て行ったとき、家族にすごい心配かけたんだよ！私も心配したし！」

「残念。それはもう昨日、母親に殴り倒され、弟に絞め殺されそうになって清算されました」

「私の心配は！」

「今日助けたのでちゃらです」

「ぐぬぅ」

「ほら、飴やるから、元気だせって」

「わー！ありがとー！」

（なんというちょろさ。まぁどうせ、リリィも子供たちも夕飯食えないだろうしなー）

村の篝火が見えてくる。

そして、村の入り口にはお母様集団が待ちうけている。

魔法使いが旧友と親交を暖めている中、そのときは刻一刻と迫ってくるのだった。

第十話「魔法使いとお風呂」

鬼の形相をした親たちと共に、村長の家に数年前にできた、通称説教部屋に子羊たちが引きずられていくところを確認すると、村長はクリスに言う。

「今回は長引きそうだの。とりあえず、疲れてるかもしれんが、こっちも話だけ聞かせてもらっていいかの？」

「了解、村長の家で？」

「うむ、あの様子だと第一陣は母親たちだろうから、順番待ちしてる者にも聞かせよう」

説教は親と村の主だった者たちがやるので、順番待ちの部屋は重要な話をするのに丁度いい。

「順番待ち・・・なんという説教地獄」

「おぬしのせいで出来たのだがな」

「さて、行きましょうか、村長さま！」

「はぁ、これ走るでない」

村長はため息をついてクリスを追う。

村長の家で、時々漏れ聞こえる怒声や泣き声を聞き流しつつ、クリスは森であったことを、村長と順番待ちの部屋で説教に向けて各々作戦を話し合ったりアップしていた面々に、少し事実を曲げて説明した。

「ふむ。では魔力食いが魔物が森に住みついて悪さをしてたのかの。それであの子たちはそれに襲われていたと」

「そそ。それで、それを森にいた精霊と、俺と契約してる精霊が倒したと」

村長が目を瞑って何か考え、ゆっくり目を開ける。

「昔、旅の人に聞いた話だと、魔力食いというのは精霊を食べるということだったんだがの」

クリスは、立ち上がって腕を振り上げ、捲くし立てるようにしゃべりだす。

「おいおい、村長さんよ。うちの精霊、フウリさまをなめないでもらおうか！そんじょそこらの精霊とは訳が違うんだぜ！風精霊ならではの用途に応じて使い分けることができる機能に富んだ魔法、すばやい移動速度と魔法行使、気配察知、遮断もお手の物。風精霊というと攻撃力が無いと勘違いする素人もいるが、あれは間違いであるとここで断言しよう！風の刃による微塵切りから、突風により磨り潰しまでなんでもござれの多種多様な攻撃！他の精霊と組めばその脅威は更に増す！それに加え、手前事で悪いけど、うちのフウリ

はそれはもう美人だし、気が利くし、やさしいところもあるし、実は最近料理に興味を持ったりと家庭的なところも見せ始めて、そこと普段とのギャップがそれはもう言いようのない気持ちを俺に抱かせるんだ！ああ、もちろん欠点みたいなものもあるよ？主に対して口が酷く悪いとか、心の柔らかい部分を抉ってくるとか。けどそういうところも含めてもあいつと契約したこと俺は後悔してないよ？なんていうのかな、契約とは別に信頼っていうのかな、そんなものがあいつと俺の間にはあるんだ。だからあいつには安心して背中を任せれるし、あいつも同じだと思う。はは、ちょっとくさかったかな、けど本心なんだぜ。まぁ結論を言うと、フウリは魔力食いなんかには負けないぜっていうことなんだ」

周りの村人は呆然とそれを眺める中、クリスが座りなおす。

（（（（結論と関係ない話が間に長々と挟まっちゃってたよ！？））））

我に帰った村人たちは、そんな感想を一様に覚えるが、皆が突っ込む前に、村長が一息吐いて言う。

「う、うむ。お前と契約した精霊さまの話はよく分かったぞ。しかしどちらにせよ、お前のおかげで、本当に助かった。ありがとう」

村長と、集まっていた面々は深く頭を下げる。

煙に巻けたことにクリスは安心し、同時に謝罪されて妙に居心地が悪くなる。

「勘弁して。そんなことされると、散々迷惑かけて出て行った身としては逆に座りが悪いっす」

クリスがそう言うと、皆頭を上げて口々に好き勝手言い出す。

「確かに違和感あるな、昔はここでクリスをいかに反省させるかを考えてたわけだしな」

「世の中分からないもんだなぁ」

「クリスのくせに俺らに頭下げさせるなんてな」

「いきなり惚気だすしな」

「そもそも、家庭的で気の利くちょっときつめな美人の精霊さまと契約だぁ！？」

「しかもセルフで言葉責め！」

「クリ坊のくせに生意気だ！」

「うちのかかぁと代えてくれ！」

「っていうか、元はといえば初代が悪いんじゃね？」

「お、それ俺も思った」

「おい初代、お前も説教参加していけよ、もちろんされる側で！」

たまらず初代が絶叫する。

「変わり身が早い上に、割とひどいなあんたたち！！」

「うるせえ！お前が作ったんだろ、あのいたずら集団！責任とれ！」

「俺の色本も責任とってくれ！！」

皆、悪態を吐きつつも、嬉しそうにクリスをもみくちゃにする。

「ほれ、クリスも疲れてるだろう。それくらいにせんか、お前たち」

村長がたしなめ、場を静める。

「まぁ、こうやって言い合ってるほうが気が楽でいいかな。けど、雲行き怪しいからそろそろ帰るわ」

「うむ。明日は久々に狩に出れるから、馳走を期待してくれ。宴会を開くぞ」

「はーい、母さんと弟にも伝えとくよ」

「うむ、頼んだぞ」

そして、村長とその他の面々、あと怒声と懺悔の声に見送られてクリスは帰途についた。

「ただいま」

クリスが玄関を開けて家に入ると・・・

「に〝い〝さ〝ぁ〝ん〝～」

ジョシュがタックルしてくる。

と、それを寸前の所でマリアンが首根っこを掴み止める。

「おかえり、クリス」

「おかえりなさい、主」

玄関には、ジョシュを取り押さえたマリアンと、フウリが立っていた。

「ジョシュはどうしたの？」

「あんたが森に魔物退治に行ったって聞いて、自警団に無理やりついて行こうとしたのを私が止めたから、ずっと玄関で待ってたのよ」

「それはまた・・・心配掛けたな」

クリスがジョシュの頭を撫でる。

「ちゃんと魔物も倒したし、明日は宴会だと」

「分かったわ。フウリちゃんもさっき戻ってきていろいろ手伝ってくれたのよ。お風呂も水入れ替えて沸かしてあるから入っちゃいな」

クリスはジョシュの頭から手をどかす。

「お言葉に甘えてお風呂に行こうかね」

「主、背中流しましょうか」

「兄さん、背中流すよ！」

「む？」「え？」

フウリとジョシュの視線がぶつかる。

「あらあら。クリスもてもてじゃない」

面白そうに言うマリアン。

「とりあえずジョシュは、昔俺の背中を力一杯擦って傷だらけにしたことを思い出せ」

「う、ごめんなさい」

ジョシュが下を向いてしゅんとする。

「それはすごいですね。なかなか主の背中に傷をつけれる者はいませんよ。誇っていいです」

クリスの身体能力を知っているフウリが嫌味無しに言う。

「まぁ、かわいい弟だしな。最初は我慢したんだけど、段々強くなっていってな・・・」

「あのときは凄かったわ。ジョシュが大慌てで呼びにきて、行ったらあんたは血だらけで倒れてるし、なにがあったのかと思ったわよ」

「ううぅ・・・」

ジョシュが涙目になってきたので、クリスがフォローする。

「ま、まぁ、今日は疲れてるから、また今度一緒に入ろうな」

そう言うとジョシュは、ぱぁっと顔を輝かせて頷く。

それを見届けて、クリスは風呂へと向かう。

その後ろを当然のようについていくフウリ。

「おい、フウリ。ついて来るな。お前も少し反省しろ」

「おかしな主ですね。私はこれと言って、お風呂絡みで反省するようなことは無かったと思いますが」

「ほうほう?昔、有名温泉地に突如謎の竜巻が発生して被害が出たことに関する弁明を聞こうか?」

「何を言っているんですか主。あれは事故です、自然現象です。乙女の柔肌を見ようとした不埒者以外に人的被害も無かったからいいじゃないですか。ついでに削られたところから温泉も出て万々歳。いい事したあとは気持ちがいいですね?」

「阿呆か!その不埒者は一応一緒のパーティーを組んでたんだぞ!再起不能一歩手前まで追い込むなよ!せめて、おとりにできる状態

くらいで我慢しろよ！おかげで後に控えてた依頼を俺一人で処理しなくちゃいけなくて、指輪に呪われたりで俺も再起不能になりかけわ！」

「では主は私の肌を人間の男に見られてもいいのですか？見下げた主ですね」

「あれ、それはなんかむかつくな。今度あいつらに会ったら九割刻むか」

「いいですね、去勢しましょう」

「同じ男としてそれは許してあげて・・・」

結局、魔法使いとその精霊は言い合いながら、風呂場へと消えて行くのだった。

第十一話「魔法使いの指輪の秘密」

「やっぱ自分のベットは落ち着くなぁ」

お風呂から上がって、ご飯を食べたクリスは部屋のベットにダイブしてごろごろしている。

「それはいいですが主、魔剣を抜いて見ましたか？」

フウリは机の椅子に座ってお茶を啜っている。

「おいやめろ、俺の今一番気にしたくない事ランキング第一位に堂々と突っ込みをいれるな。触れないようにしてたんだ。ちょっと時間置いて魔剣があの黒いの消化してからでいいじゃん」

「消化するような器官はあの魔剣にはついていません。もう取り込んでしまったでしょう。抜いてください」

お茶を置いてクリスに詰め寄るフウリ。

「え、なんでそんな積極的なのフウリさん」

「私の推察が正しければ、その魔剣、面白い事になってますよ」

「ちなみにその推察とは？」

興味を持ったクリスは聞き返す。

「ふむ、説明したほうが主も安心できそうですね。それでは説明し

ます。まず、あの魔力食いの黒い霧ですが、いろいろな説があります。あれが魔力食いの本体だとか、あれは取り込んだ魔力が大きすぎて体から溢れているとか。私個人の見解ですと、黒い霧は一種の消化器官だと思っています」

「消化器官・・・他の生物の魔力をあれで消化して自分のにしてるのか」

「そうです。普通、面倒な手順を踏まないとできない生物間での魔力の取引を、一方的にできるようにしているモノがあの黒い霧だと推察します」

「あれけどそれなら、うちの魔剣もできないっけ？」

「あれは相手を切って体内に刃が接触しないとできません。十分面倒な手順でしょう。ついでに吸引するだけで、その魔力で出来ることも限定されてますし」

「なるほどなぁ」

「世界からの魔力供給を一切できない魔力食いが、あの黒い霧によって他の生物から魔力を食らって生きている。そこまではいいですね？」

「さすがフウリ先生、教え方も上手くて素敵！」

学院時代、クリスの追試前には付っきりでフウリが勉強を教えていたので、教えるのはお手の物だ。

「もっと褒めていいですよ？」

「続きを期待」

「仕方ない主ですね。それで、元々黒い霧と魔剣は似ているところもありますので、うまく吸収できていれば、黒い霧の力が使えるかもしれないと思うのです。魔剣からもほんのり魔力食いの力を感じますしね」

「フウリ先生質問があります！」

手を上げるクリス。

「はい主、そこで三回回ってワンと鳴いてから質問をどうぞ」

クリスを指し、ついで床を指差すフウリ。

「学院の変態教師どもでもなかなかそんなこと言わねぇよ！？じゃなくて、結局うちの魔剣ちゃんは何ができるようになったの？」

「ふむ。黒い霧は取り込んだ魔力を完全に自分のものとして扱えるようにする器官だとするなら、本来なら魔剣に蓄積した魔力は切れ味向上と斬撃を飛ばすことしか出来なかったのが、主の好きにできるようになるんじゃないかと思います」

「おお・・・！？」

「つまり、擬似的に魔力量が増えて、しかも回復量も増えた上に、切れば切るほど魔力が回復する、ということになってるかもしれないですね。さぁ、主の研究がまた一歩進むかもしれないのです、すぐ抜きましょう」

フウリはクリスに剣を抜くよう急かす。

「お、おう。それじゃあ、抜くぞ？抜くからな！？」

クリスは、恐ろしいものを触るかのように剣を手に取る。

「早くしてください、へたれ主」

「あはい」

意を決したようにクリスは剣を抜く。

しかし、特に何も起こらない。

「ん？何もなさそうだよ？」

「本当にお馬鹿さんですね主。魔剣の魔力を使わないと分からないでしょう。そうですね、剣を握って私に魔力を送るイメージをしてください。どうも私からは奪えそうに無いので」

「ほほう」

クリスは目を瞑って、契約で出来ている自分からフウリへの魔力の流れに、剣からも魔力が流れるようにイメージする。

「ふむ。これはこれは」

フウリが楽しそうに呟く。

「お？できた？」

クリスが目を開けて聞く。

「ええ、ばっちりですね。しっかり流れ込んできて、主の魔力の味がします」

「え、どういうことなの」

「簡単に言うと、魔剣は自分の魔力を主の魔力に限りなく味を似せているのです。なので、剣を通して魔力を使う他に、主は簡単に剣の魔力を自分の魔力として取り込んで使うこともできるようですね。けど、魔力の所有者は魔剣なので、いくら味が似ていても直接私が奪うことはできないのです」

「おおー！自由にできる魔力がふえたのか！」

クリスは喜び剣を抱く。

「そうです、よくできました。けど、主が魔剣から魔力を吸い取ればそれは主の魔力なので、私の好きにできます。喜ばしいことです」

フウリの言葉を聞き、剣を置きながらクリスがつぶやく。

「なんか魔力が増えたと思ったら、結局そうでもなかったような感じになってる件」

「いえいえ、切れば切るほど魔剣の上限までは使える魔力が増えますよ。よかったですね。早速ドラゴン狩りに行きましょうか」

「過激発言禁止！！そもそも魔剣は今お腹いっぱいなので切っても取り込めません！」

クリスが腕を交差させ、フウリを止める。

「魔剣から主を通してその指輪に魔力を送って、魔剣の空きを作ればいいじゃないですか。ああけど、ちょっと容量が足りないようなので、その指輪を量産しないといけませんね」

「無茶言うな！この指輪の元、どんなもんか知ってるだろ！一時期この指輪に呪われて大変な思いしただろうが！」

「そういえば、主が遺跡にあった指輪を何の疑いも無く手にとって、危うく契約が切れそうになりましたね」

しみじみと思い出し、フウリが言う。

「その節は大変ご迷惑をおかけしました、すみません」

クリスはすぐにフウリに頭を下げる。

「まぁ、いいでしょう。魔剣の確認も出来たことですし、そろそろ寝ましょうか」

「おう。今日は一緒に寝ないからな！」

「主は私に床で寝ろというのですね」

「おい、現在進行形で浮いてるだろうが」

「馬鹿なこと言わないでください、浮いてるのは主の存在ですよ」

「そっちの浮くじゃない！！ったく、さすがに疲れてるからもう寝るぞ」

そう言ってベットの端に寄る魔法使い。

精霊が空いたところに潜り込む。

結局、一緒に寝るのだった。

第十二話「魔法使いと周りの国々」

晴れ渡った朝、クリスとフウリは魔力の都合がついたので、火精霊が養生している洞窟へ向かう。

「ところであの火精霊さん、格高いの？」

「なんですか主。私以外の精霊に興味津々ですか？浮気ですか？」

蔑む様にクリスを見るフウリ。

「突拍子も無いこと言うねお前！」

「冗談です、半分くらい。あの精霊はなかなかの格ですよ、私と同じところにいても逃げないくらいには」

「そう考えると、凄いよな。大抵の精霊はフウリにあんまり近寄ってこないからなぁ」

「似たもの同士ですね、主と私。少し照れてしまいます」

フウリは表情を一切変えずに言う。

「真顔で言わないでくれる？しかも俺は別に人が寄ってこないわけじゃないよ！？」

「何を言うかと思えば。主、良く思い出してください。あのいろいろぶっ飛んでる友人たち以外に主に友達がいますか？人間の、ですよ」

「えっと・・・あれ・・・？吸血鬼とか竜人とかもだめ？人間に似てるじゃん、あ！エルフ！エルフはセーフでしょ？」

クリスはギルドの関係で変な人脈はあるのだが、まともな友達が少ない。

「一般的な友人はほとんどいませんね、それが現実です」

「う、うそだと言ってよフウリぃ・・・」

がっくりと膝をつくクリス。

「大丈夫です、主。例え主が世界を敵に回しても、私は主の味方ですよ？」

「え、なにこれ、うれしい」

クリスがぱっと顔を上げフウリを見る。

「一度世界を壊してみたいと思っていたんです。二人の楽園を築きましょうね」

フウリが薄く笑って言う。

「過激すぎるわ！普通でいい、普通の友達がほしい」

地面を叩きながらクリスが言う。

「あのぶっ飛んだ人たちと付き合っている以上無理でしょう。主も

ぶっ飛んでますしね」

「他国ならできるかもしれん！」

「頑張ってください。ただ、帝国では、主は要注意人物としてマークされてるので、気をつけて旅行しましょうね」

「て、帝国以外にも国はあるし！」

「ほうほう。あれですね、主のせいで停戦交渉してるあの国ですか？あっちはまだ交渉中なので危ないですよ？」

「せ、聖王国が・・・！」

「ふむ。お姫さまを主が誑かした国ですね。王様が親馬鹿でしたね。あそこの王族は天使の気配もほんのりしたので、あのときは生きて出れただけでも有難いと思いますよ」

「勘違いだあれは！！っていうか、あれ。俺がこの国から出るの、大変じゃね？」

「さて、主が現実を認識できたところで。あの洞窟が火精霊の棲家です」

前方を指差してフウリが言う。

「はい・・・」

クリスはフウリの先導で洞窟の奥へと進む。

「ほー、これは結構魔力が溜まってるな」

関心したようにクリスが呟いていると、火精霊がふわふわとやってくる。

「ぼんやりと人型を取ってるということは、かなり高位？」

「そうですね、今は消耗しているので、ぼんやりですが、回復すればくっきりするかもしれませんね」

「すぐに魔力を渡すんだ、フウリ」

「何で急にやる気になってるんですか主。ああ、そういうとこですか、相変わらずむっつりですね。私と初めてあったときも挙動不信でしたよね」

「ちちち、違うし、別に裸目当てとかじゃねぇし、勘違いするなし」

「主、盛大に自爆してます」

ある程度、人の世界に興味を持っている精霊以外は服というものを知らない。

知っていても、理解できない精霊がほとんどだ。

フウリも契約当初は全裸だった。

クリスが必死に教えて、やっと魔力で服を作るようになったのだ。

クリス曰く、ちょっと見れるのはどきどきするけど、四六時中となるとその限りではない、そうだ。

そんなフウリも最近では、料理と共にファッションにも凝るようになっている。

「それでは魔力を渡しますよ」

そう言うと、フウリはふわふわ浮いていた火精霊を抱き込む。

すると段々二人が光っていく。

クリスは期待に満ちた目でその光景を見守る。

光が収まると、そこには子供の姿の火精霊が立っていた。

「くそ！幼女じゃねぇか！責任者呼んでこい！」

絶望した魔術師の声が洞窟にこだまするのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5884z/

魔法使いと風精霊

2011年12月22日00時32分発行